明海大学 不動産学部

不動産の不思議

学生たちの視点と発見

第209回

緑地公園を生かす

自然生態系で印象の改善を

武田 亜輝士
不動産学部3年

【学生の目】

通学時に通る雑木林のような公園＝写真＝に目を引かれた。公園は神社に隣接し、周囲には低層の戸建て住宅が多い場所にある。檜などの樹木が密生して日差しがほとんど入らず、公園内は昼間でも薄暗い。成年男子の筆者でも積極的に入りたいとは思わない。

公園には、住宅地内にコンパクトに点在する児童遊園から、大規模な都市計画公園まで大小様々なものがある。また、自治体が整備して管理するものもあれば、住宅地開発等で開発事業者が整備して自治体が管理する、民間由来のものもある。いずれの公園も、安心で安全、かつ健康的な公園として機能するためには、目的に応じた整備の内容と管理が大切だ。写真の公園は防犯上の問題もありそうだ。そこで、誰が管理しているか調べた。

この公園は緑地公園で、公開型緑地と位置付けられている。誰でも入ることができ、あふれる緑を体験できる公園だ。市が管理し、自然環境保護団体がボランティアとして管理に参加している。この団体が落ちた枝やごみを拾うなどの管理を行い、ボランティアに参加する子供たちには、緑を体験する貴重な機会を与えている。

一方、ボランティア活動で必要な管理行為のすべてをカバーすることは困難だ。例えば、計画的な管理行為、費用を伴う管理行為などだ。実際、木々の枝が伸びて地表には日照がなく、下草や木々の芽生えがない。密生した細い木は風や雪に弱く、子供が接する地面は「植物が無い緑地」となっている。このままでは公園利用者も減り、有効な土地利用とは言えなくなる。緑地公園に「緑の教育」の機能があるとすれば、持続可能な緑地に不可欠となる、植物の世代交代が理解できる工夫が必要である。

近寄りがたい印象を改善するには、まず公園に入ってみようという気持ちを起こさせるようなスペース、例えば、中心部に明るく開けた場所を設けることだ。次に道路沿いにいきなり大木を配置するのではなく、地域に合った自然生態系をうまく取り入れて、子供たちの興味をそそるような仕掛けをつくることだ。例えば「ビオトープ」を取り入れることが考えられる。ビオトープには、広さや形状が自由、オープンスペースを提供する、動物が生息する、季節の変化を映し出すなどのメリットがある。緑の教育にも有効で、ボランティア活動でも管理ができる。

薄暗く入りにくい印象を払拭することが必要

【教員のコメント】

郊外で緑の環境を演出する農地と林地のうち、林地は生産性が皆無な一方で保有税が高く、維持することが難しい。開発素地となるところ保存を主眼に公園とする例があるが、宅地余剰時代にはコモングリーンとして積極活用することが望ましい。